

鎌倉武家社会における元服儀礼の確立と変質

今野 慶 信*

Establishment and alteration of Genpuku ritual in Kamakura samurai society

Yoshinobu KONNO*

Abstract

“Genpuku or Kakan” which changes from a child society to an adult is one of life ceremonies, but in particular it has developed its own development in samurai society. In other words, Kakanyaku who covers Eboshi-cup, a witness of an adult, on a boy at the time of Genpuku ritual is called “Eboshi parent”, and has established a certain human relationship with “Eboshiko”. This was called the Eboshi parent-child relationship, and it became one of the pseudo-kinship relations. Therefore, in considering the “master-slave system” which is one of the action principles of medieval samurai, it is a very important element. In this paper, we mainly gather data on the Genpuku ritual in the Kamakura period, and examined the form in which the Genpuku ritual was established and the process by which the ritual was changed.

はじめに

中世の武家儀礼は通常、室町幕府において完成されたものとされる^①。なかでも人生儀礼については、最近では「矢開き」が武士の職能を良く示してくれるものとして注目されている^②。その他、これまでも鎌倉幕府二代將軍源頼家の誕生儀礼なども注目されてきた^③。もともと「元」は頭首のことで、「服」とは冠のことであるため、「首服」とも言い、成人男性の証である冠（烏帽子）を初めて被るということで、成人（式）を意味し、その儀式内容から「加冠の儀」とも言われた。したがって「冠者」とは本来元服した者のことである。

元服の持つ意義については、これまでも烏帽子親子関係や偏諱などについて注目されてきた^④。すなわち、元服に当たっては仮親となる烏帽子親を定め、加冠役とする。元服する本人は、烏帽子親の子である烏帽子子となり、それまでの童名（幼名）を廃し、仮名と実名（諱）が新たに付される。その際、烏帽子親の実名の一字（偏諱）が下されることが多い。これを一字付与という。元服自体は公家社会に由来するものであるが、烏帽子親子関係は擬制的親族関係のひとつと捉えられ、武士の主従関係強化に利用された。一字付与については、中世後期に至って、室町將軍や戦国大名より一字書出という文書が出されるようになり、武家儀礼のひとつとして定着する。今回は、武家の元服及び一字付与の発生段階としての鎌倉期を中心に概観する。それゆえ、元服の持つ意味合いが生の形として、かつその本質が露わになっているものと考えられ、その展開を跡付ける意義は大きいものと思う。

一・將軍家と北条得宗家の元服

まずは、一般的な儀礼内容を確認しておこう。

元服は、通常十五歳前後で行われる男子の成人式で、それまでの無帽を止め、初めて冠（烏帽子）をかぶる儀式である。冠は加冠役が被せる。同席の理髪役は、櫛で髪を理する役目である。元服童はここにおいて幼名（童名）から仮名と実名（諱）が付される。

ちなみに天皇の場合は、加冠は太政大臣、理髪は左大臣があたった。皇太子の加冠には傳があたる。なお、摂関家の子弟は殿上で元服し、天皇が加冠役を務めた。

『古事類苑』礼式部九は、元服に関わる関連記事を集めている。これなどを参考に、別掲の「【表】中世前期の武家元服関係史料データベース」を作成してみた。本表は、中世前期の武士に関する個別の元服や一字付与に関する史料のうち、年代が明記されたり、ある程度史料批判に耐えられるもの六十一点を集成してみたものである。

では、鎌倉將軍家と実質的に鎌倉幕政を領導した北条得宗家の元服儀礼を見ていこう。

①源氏將軍家

源氏の元服と言えば、その通称の由来である八幡太郎義家の石清水八幡宮社前で元服が有名である。義家のみならず、加茂次郎義綱・新羅三郎義光の三兄弟それぞれの元服は世に喧伝されており、『古事類苑』は神社での元服の例として紹介している。もっとも、これらは同時代史料として確認されているわけではない。義家の幼名は源太とも

不動丸とも伝え、七歳のことも言うが、その正確な時期及び年齢は不明である。このこと示す早い史料は『平家物語』かもしれない。木曾義仲のセリフとして「我四代の祖父義家の朝臣は、此神の御子となして、名をば八まん太郎よし家とがうしき」とある（表7）。すなわち、真偽は不詳ではあるが、木曾義仲も石清水八幡宮で元服したという。下って『太平記』三六「清氏叛逆事附相模守子息元服事」には、細川清氏も二人の子息を八幡で元服させ、八幡六郎と八幡八郎と名付けたため、將軍足利義満の不信を招くに及んだと描かれている。

さて、源氏將軍家では三代実朝の元服のみ知られる。

●『吾妻鏡』建仁三年（一二〇三）十月八日条〔表21〕

今日。將軍家（年十二。）御元服也。戊刻。於遠州名越亭有其儀。

前大膳大夫広元朝臣。小山左衛門尉朝政。安達九郎左衛門尉景盛。

和田左衛門尉義盛。中条右衛門尉家長已下御家人等百余輩着侍座。

江間四郎主。左近大夫將監親広持参雜具。時剋出御。理髮遠州。

加冠前武蔵守義信。次渡御休所後進御前物。江間・親広為陪膳。

役送。結城七郎朝光。和田兵衛尉常盛。同三郎重茂。東太郎重胤。

波多野次郎経朝。桜井次郎光高等也。（各近習小官中。被撰父母見

存之輩召之云云。）次奉鎧・御劍・御馬。佐佐木左衛門尉広綱。

千葉平次兵衛尉常秀以下役之。

頼朝と北条政子の次男千幡は、建仁三年（一二〇三）十月八日、十二歳で元服し、実朝となった。このとき、父頼朝は亡く、前將軍で兄の頼家は幽閉中で、実朝は既に前月の九月七日より將軍だった。実朝という実名は朝廷において決められたという。したがって、実朝の

元服は幕府の公式行事となろう。御家人は百余人列席している。しかし、元服式は外祖父北条時政の名越の私邸である浜御所で行われた。

これはとりもなおさず北条時政の権勢振りを示すものであろう。同時に時政は理髪役も務めている。加冠役は義光流源氏の平賀義信。幕府草創期から頼朝の門葉として厚遇されており、この時も源氏一族の長老として加冠役を任されたのであろう。十日には政所始、着甲始、乗馬始、弓始など一連の儀礼行事が行われた。

その他の源氏將軍家の元服の様子は残念ながら史料がない。二代頼家（万寿）は建久七年（一一九六）以降の元服と思われるが、『吾妻鏡』が欠巻であり史料がない。実名の「家」は、八幡太郎義家の一字と考えられるから、おそらく鶴岡八幡宮での元服ではなかったか。

②撰家將軍家

源氏將軍は三代で終わり、その後、撰閑家から四代將軍が迎えられた。九条三寅である。京都から鎌倉にやって来たときは若干二歳であり、公家や女房・陰陽師たちも同時に下向しているから、公家風や撰閑家風のやり方が入ってくる。嘉禄元年（一二二五）十二月八日、三寅の元服日時に関する勘文も京都から送られている。

●『吾妻鏡』同日条

若君御元服日時勘文。自京都今朝到來。来廿九日乙卯午時云云。在繼撰申之。然件日。云御移徙。云御首服。重疊頗可為卒爾之間。如先度御定。来廿日有移徙如何之由。被尋于閑東陰陽師等。各申云廿九日四不出日也。雖有先例。聊劣於廿日歟云云。仍儀定畢。

則御移徙勘文被召之云云。

●『吾妻鏡』同年十二月二十九日条【表28】

若君御方（御年八。）御首服。申刻。於二棟御所南面有其儀。後藤左衛門尉基綱。今日為奉行也。時刻出御。二条侍從教定奉扶持之。武州。陸奥守義氏已下。被著侍座。次元服雜具被置之。（北条時義）駿河守候陪膳。周防前司親実。右馬助仲能等為役送。理髮・加冠武州。御名字（賴經。）前春宮權大進俊道朝臣撰申之。相州去廿三日以後病痾之間。今日不出仕給云云。

同月二十九日、八歳で三寅は二棟御所南面において元服した。藤原賴經である。行事の差配は御所奉行と思われる後藤基綱が務め、加冠・理髮共に執権の北条泰時四十四歳が務めている。名字の「賴經」は前東宮權大進俊道朝臣が選んだものであった。賴經は翌二年に將軍に任命されている。

二十年後、賴經の若君御前六歳の元服が行われた。五代將軍藤原賴嗣である。奉行は前回と同じく後藤基綱で、前回の儀式が「嘉祿の例」として先例とされている。

●『吾妻鏡』寛元二年（一二四四）四月三日条

若君御前御元服事。有其沙汰。先為御祈。於春日社壇可被始行唯識講之由被仰遣。布施物被物十重。裏物十。供米十石者。可為六波羅相州別進云云。此吉事。被点来廿一日。又依可被行吉書始。令在知之。以後日同為被令行。今日被仰六波羅云云。

●『吾妻鏡』同年四月二十一日条【表37】

*以下『吾妻鏡』は読解のため、適宜改行している。

今日。將軍家若君（六歳。御名字賴嗣。御母中納言親能卿娘大宮局。）御元服也。依被用嘉祿之例。前佐渡守基綱奉行之。申刻有其儀。織部正晴賢朝臣（衣冠。）持參日時勘文。（入覽筥。）前美濃守親実朝臣於西侍（端座。）取之。経廊根妻戸。入寢殿西面妻戸。置御座前。（板敷。）將軍家覽之被返。入筥。親実給之。持来侍所。懷中勘文。若君着御装束。（有文御直衣。二倍織物。御指貫。白單。不令結御髮給。親実朝臣候之。定員為御前装束。）武州（白襖狩衣。薄色生指貫。着帷下袴。）參給。二条中将教定朝臣（布衣。上括。任嘉祿例。可奉扶持云云。然而女房被催之。無指所役歟。）前右京權大夫資親朝臣等同候此所。御装束訖。渡御寢殿西面。（女房奉扶持。）（北条時義）武州參進。被勤仕理髮・加冠。（引入御烏帽子。）次進御前物（土高坏。両御方。）

陪膳 左近大夫將監時頼。（已下所役。両御方被相兼之。）

役送 能登右近大夫仲時・毛利兵衛大夫広光。

兩人共為陪膳之位次上臈也。自叶嘉祿例哉。

次冠者殿令婦入給。次人人着庭上座。次上御簾。大夫將監時頼役之給。次冠者殿改換装束（無文御直衣。指貫。）參給。

次献御引出物 御劍 前丹後守泰氏（白襖狩衣。薄色生奴袴。着下袴。）経西侍簀子并廊入妻戸。置御座傍（左方。）

一御馬（置鞍） 備前守時長（半靴）

前右岐守泰綱（野劍毛沓）

二御馬（同）

駿河式部大夫家村 同五郎左衛門尉資村

三御馬（同）

遠江次郎左衛門尉光盛 同五郎左衛門尉盛時

次入御 次冠者殿（將軍被奉扶持。）出御二棟。（嘉祿例如此。）

次進物 御劍前右馬權頭政村（薄青白裏狩衣。薄色指貫。）經實子。入第三間置之。御弓征箭（羽切生）遠江守朝直（白襖狩衣薄色指貫）左手持矢。右取弓。倚立御座傍柱。御刀（鞘卷。在下緒。）

相模右近大夫將監時定。（以刃為内捧之。）御鎧（紫糸威。副赤地錦御直垂。居甲櫃蓋。）越後守光時・遠江式部大夫時章。置御前長押下。（以胃前。向御前。）羽（納箱）前若狹守泰村。砂金秋田城介義景。已上兩種置長押上。次武州依召參進廊。賜御劍。（入袋。前準人正光重伝大夫將監時頼。親衛於廊被奉之。）下立庭上一拝給次入御。今日少人数度出御。其儀各移剋之处。敢無御窮屈。偏如成人。貴賤皆所奉感嘆也。抑御任官事。任嘉祿之例。可為後日。又可令蒙將軍 宣旨給云云。是依天変。御讓与事。俄思食立之上。五六兩月。當御慎之間。今月被逐此儀也。御名字。兼日風聞。兼頼也。（自京都。被選進。兩三之其一。）而今所被用將軍家御計也云云。

次武州相率評定衆。被參政所。有吉書始儀。（中略）次云御元服無為事。云新冠任官叙位事。可被申京都之由有議定。被整御消息等。被奉讓征夷大將軍於冠者殿之由云云。平新左衛門尉盛時応其準脚。已雖及黄昏。吉日之上。依為御急事進發。行程被定六ヶ日云云。

頼嗣の元服は、寛元二年（一二四四）四月二十一日、六歳で行われ、父の將軍頼経二十七歳の御前で行われた。加冠役は執権の北条経時二十一歳であった。「嘉祿の例」と比べると、場所や加冠及び理髪役が執権、奉行が後藤基綱であること、などが同じで、相違点は將軍臨席

の有無である。頼嗣の名前は京都からの選申であった。こうして同月二十八日、將軍職が頼嗣に譲られた。このように、二代に渡り、現役の執権が將軍家の加冠役を務めている。

③親王將軍家

摂家將軍が二代で終わると、建長四年（一二五二）天皇家より六代將軍が迎えられた。後嵯峨院の第一皇子宗尊親王である。宗尊は同年正月、十一歳で元服しているが、これは関東下向以前のことであるので、ここでは検討の対象とはならない。

宗尊は文永三年（一二六六）七月四日、將軍職を辞任し、八日には鎌倉を離れた。二十四日には宗尊の第一皇子が三歳で七代將軍となり、四年後の文永七年（一二七〇）二月二十三日、元服を遂げた（表45）。惟康親王である。加冠役は連署の北条政村六十六歳である。執権で北条氏家督の時宗は、この時十九歳だったので、加冠役を務めなかったであろうか。なお、惟康はこの年十二月には源姓を与えられ、弘安十年（一二八七）まで源氏將軍が復活していた。在位二十年に及ぶ。正応二年（一二八九）十月六日、後深草天皇の第六皇子久明親王が十四歳で元服し、九日八代將軍に任じられた。これも関東下向以前のことである。將軍在位は十九年となる。

延慶元年（一二三〇）八月二十六日、久明親王の子守邦親王八歳が元服を遂げ（表54）、即日最後の九代將軍となった。加冠役は不明であるが、得宗北条貞時は出家して法体だったため、貞時ではなからう。以上、九人の將軍のうち、実は見過ごされがちな事実が、三代実朝

と七代惟康親王の元服が將軍任官の後であつた点である。すなわち、二人は元服前に將軍となり、後日元服を遂げている。二人の共通点としては、周知のように鎌倉にいたまま、上洛していないことである。実は公家社会には同様な即位後の元服として「天皇元服」というものがある。⁽⁶⁾ もっとも、天皇元服が正月五日以前に行うことを例としているのに対し、臨時の応急的なものであり、「將軍元服」というものではない。なからう。いずれにしても両者共、幕閣首脳の強い意図があるからであらう。

④ 北条得宗家

次に一方の北条氏の家督・得宗家の元服の様相を見ていこう。歴代の仮名については森幸夫氏の考察がある。⁽⁷⁾ 氏は得宗家の後継者は原則として仮名「太郎」が使用されることを明らかにされた。しかし、実名や元服に関する研究ではない。

初代四郎時政の元服に関する史料はない。嫡男は戦死してしまった三郎宗時であつたが、これまた史料はない。

時政の跡を継いだ四郎義時は長寛元年（一一六三）生まれなので、元服は承安三年（一一七三）頃と思われるが、これも史料はない。

史料上明らかになるのが、義時長男の三代泰時（金剛丸）からである。建久五年（一一九四）二月二日、金剛丸は幕府西侍において元服を遂げ、太郎頼時と名乗った。加冠役は將軍頼朝。幕府西侍には錚々たる御家人三十四人が十一人づつ三列に列座している。第一列に父の義時、第三列に祖父の時政が見えるものの、半ば公式行事と位置付け

られよう。

●『吾妻鏡』同日条【表20】

入夜。^(北条時)江間殿嫡男（童名金剛。年十三。）元服。於幕府有其儀。西侍構鋪設於三行。（中略）時刻。^(時政)北条殿相具童形參給。則將軍家出御。有御加冠之儀。武州・千葉介等取脂燭候左右。名字号太郎頼時。次被献御鎧以下。新冠又賜御引出物。御劍者里見冠者義成伝之云云。次三献。碗飯。其後盃酒数巡。殆及歌舞云云。

次召三浦介義澄於座右。以此冠者。可為婿之旨被仰含。孫女之中撰好婦。可随仰之由申之云云。

このとき頼朝の命により、頼時と三浦義澄の孫女を許嫁としたことも注目されてよい。なお、この後、頼時は泰時と実名を改めるわけだが、その理由や時期については明確でないものの、おそらくは烏帽子親の頼朝の死去に伴うものであらう。

泰時長男の四代太郎時氏（幼名不詳）については史料がない。建仁三年（一二〇三）生まれであるから、建保元年（一二一三）頃の元服であらう。その実名からは足利義氏を加冠役とした可能性もあるのではないだろうか。加冠役が將軍実朝ではない点に注目できる。時氏は執権になる前に、二十八歳で死去している。

時氏の長男葉上は、天福二年（一二三四）三月五日、十一歳のとき、四代將軍頼朝十七歳を加冠役として御所において元服した。五代弥四郎経時である。

●『吾妻鏡』同日条【表33】

^(北条時)武州孫子。（匠作嫡男。歳十一。）於御所。被加首服。相州。（布衣。）

相州。(布衣。)武州。(同。)越後守。式部大夫。(政一。)前民部權

少輔。摂津守師員。駿河前司義村。出羽前司家長。大夫判官基綱。

上野介朝光等着西侍。若公(水干。)同侍南座。有小時。以藤内

左衛門尉定員。被召之。若公被參于寢殿西向簾中。其後応召。武

州參給。式部大夫。前民部權少輔。左近大夫將監佐房。左衛門大

夫泰秀。右馬權助仲能等勤所役。次理髮相州。(北本時房)次御加冠。号北条

弥四郎經時。次八条少將取御劍。授新冠賜之。退出于休所。

次両国司已下人人着座庭上。(藤原賴経)將軍家出御南面。八条少將実清朝臣

候御簾。次被進御引出物。御劍。御鎧。御馬等云云。

其後被垂御簾。新冠已下人人。又堂上有碗飯儀。一如元三。武州

退出之後。被引進竜蹄於相州。平左衛門尉盛綱為御使。又以尾藤

左近將監入道。諏方兵衛尉等。今日役人面。被賀仰云云。

次いで、時氏の次男で、經時の弟戒寿も、嘉禎三年(一二三七)四

月二十二日、頼經の御前で十一歳で元服した。六代五郎時頼である。

●『吾妻鏡』同日条〔表35〕

入夜。(北条泰時)左京兆孫子小童。(字戎寿。故修理亮時氏二男。)於御前有

元服之儀。先城太郎義景。大曾禰兵衛尉長泰等持參雜具。次駿河

前司義村候理髮。次御加冠。次被進御引出物。

役人 御劍 右馬權頭(政村) 御調度 北条大夫將監(經時)

御行騰 小山五郎左衛門尉(長村)

御甲 駿河次郎(泰村) 同四郎左衛門尉(家村)

南廷 長井左衛門大夫(泰秀)

一御馬(黒鹿毛置鞍) 駿河五郎左衛門尉(資村)

同八郎(胤村)

二御馬(瓦毛) 相模六郎(時定) 平左衛門三郎(盛時)

次駿河前司賜御引出物。

御劍 後藤佐渡前司(基綱)

御馬(栗毛槽毛置鞍) 南条七郎左衛門尉(時貞)

次自將軍(頼経)新冠(号五郎時頼。)被賜御引出物。

御劍 宮内少輔(泰氏) 御調度 遠江式部大夫(光時)

御甲 上野七郎左衛門尉(朝広) 同三郎(重光)

御馬(黒置鞍) 近江四郎左衛門尉(氏信)

同左衛門太郎(長綱)

次いで、七代目は時頼の次男時宗である。正嘉元年(一二五七)二

月二十六日、御所において宗尊親王を加冠役として七歳で元服し、幼

名正寿から太郎時宗となった。

●『吾妻鏡』同日条〔表42〕

今日午二点。相州禪室若公(北条時頼)(御名正寿。七歳。)於御所被加首服。

奥州并御家人(各布衣下括。)著西侍。於二棟御所有其儀。副東

障子設御座。(大文高麗縁)若公著童裝束。(狩衣。袴繡。)被着武

州座下。時刻。將軍家出御。(宗尊親王)土御門中納言(顯方卿。直衣。)出

二棟南面妻戸。蹲居廊根妻戸間。向若公告召之由。若公被參御前。

武州被奉扶持之。次賜御裝束・御烏帽子。退下。於中御所西对渡

廊。立屏風。被着所賜之御衣。(浮線綾狩御衣。紫浮織物御奴袴。

蘇芳二袖。紅單衣。)則又被參簾中。武州扶持如先。其後置雜具。

先秋田城介泰盛持参烏帽子。(置柳筥。)進御前簀子。擡御簾進入之。
次壹岐前司泰綱取打乱筥。大宰権少貳景頼役汨坏。(置柳筥。)已
上作法如先。次奥州起侍座。経廊西縁。被候切妻戸庇。(北条長時)武州者为
理髪役被候簾中。其外人人廊西南座列。(北上。東切折束。)

次武州参進理髪。次新冠候御座前給。御加冠。次新冠三拜。次本
役人等参進撤雜具。武州出於簾中。加于庭上。次黄門出自二棟南
面。上同西面御簾三ケ間。次進物。御剣武蔵前司朝直。御調度尾
張前司時章。御鎧刑部少輔教時。左近大夫将監公時。御野矢下野
前司泰綱。御行騰和泉前司行方。

一御馬(置鞍銀) 陸奥六郎義政 原田藤内左衛門尉宗経

二御馬(白伏輪鞍) 陸奥三郎時村 工藤左衛門尉高光

三御馬(同) 相模三郎時利 南条新左衛門尉頼員

次新冠給御剣。(自取之給。)退出。武州更堂上扶持之。便被着侍座。
次人人帰着同座。有三献儀。次新冠御前杓。(其座武州已下如初。)

次預書下御名字。(時宗。)黄門給之。被授武州。

なお、「御名字」の「時宗」と書かれた「書下」の存在が確かめられ
るが、これはのちの時代の「一字書出」につながっていくものである
う。

八代目は時宗の長男貞時。建治三年(一二七七)十二月二日、七歳
のとき元服し、幼名幸寿を太郎貞時と改めた(表48)。加冠役は不明。
將軍惟康親王だとすれば、親王はこのとき十四歳であるが確定できな
い。なお、このときの模様が『建治三年記』同日条に詳しいが紙幅の
都合もあり、引用しない。

九代目は貞時の長男高時。延慶二年(一二三〇)正月二十一日、七
歳のとき元服し、幼名成寿を太郎高時と改めた(表55)。加冠役は不明。
將軍守邦親王だとすれば、このとき九歳であるが確定できない。

なお、高時の長男は邦時である。鎌倉幕府が滅亡しなければ、次の
得宗であった。元弘元年(一一三二)十二月十五日、七歳のとき元服
を果たし、幼名万寿から太郎邦時と改めた(表61)。加冠役はその実
名から將軍守邦親王であろう。

以上、北条得宗家の元服は、いずれも家督を継承する前に元服を果
たしていること。前期の泰時・経時・時頼の三代は祖父健在時の元服
であること。時宗以降の四代はいずれも七歳で元服しており、文字通
り儀礼化していたこと、などが指摘できる。ちなみに七歳での元服は、
八幡太郎義家と惟康親王がそうであった。

そして、鎌倉幕府の主従制的支配権・統治権的支配権を分掌した將
軍と得宗の元服は、相互に補い合ったとも評されるが、それは四代將
軍頼経・五代頼嗣と執権経時・時頼のときと、六代將軍宗尊親王と時
宗の時期に限られ、七八九代の將軍と貞時・高時に関してはその痕跡
はないこと、しかしながら最後の將軍守邦親王と次期得宗となるはず
だった北条邦時はそのような可能性があったことなどが指摘できる。

二. 鎌倉御家人の元服

次に御家人一般の元服の模様を眺めてみよう。元服は人の一生にお
いて大事な節目であり、全員が漏れなく通過する通過儀礼でもあるが、
史料に残ることは稀である。そうしたなか、『吾妻鏡』には十九例の元

服記事が所見され（將軍及び得宗を除くと十二例）、それらは全て、鎌倉後期における『吾妻鏡』編纂メンバーの祖であるとの指摘がなされている。^⑧『吾妻鏡』以外では、やはり系図類となつてしまい、史料的信息性もいささか低くなつてしまふが、現在収集しえた事例から分析してみよう。

まずは源頼朝の時代を眺めてみる。

●『吾妻鏡』治承四年（一一八〇）十月二日条【表8】

^{（源頼朝）}武衛御乳母故八田武者宗綱息女。（小山下野大掾政光妻。号寒河尼。）相具鐘愛末子。参向隅田宿。則召御前。令談往事給。以彼子息。可令致昵近奉公之由望申。仍召出之。自加首服給。取御烏帽子授之給。号小山七郎宗朝。（後改朝光。）今年十四歳也云云。
結城朝光の場合、頼朝の乳母子でもあったから、二重の關係で二人の關係は深いことになる。場所は、頼朝が鎌倉に入る直前の行軍中であつた。

続いて、平時ではないということでは、戦場での例もある。

●『吾妻鏡』文治五年（一一八五）八月十二日条【表15】

一昨日合戦之時。千鶴丸若少之齡而入敵陣。発矢及度度。又名謁云。河村千鶴丸云云。^{（源頼朝）}二品始令聞其号給。仍御感之余。今日於船^{（陸奥国）}追駅。被尋仰其父。小童為山城權守秀高四男之由申之。依之。於御前俄加首服。号河村四郎秀清。加冠加加美次郎長清也。此秀清者。去治承四年。石橋合戦之時。兄義秀令与景親謀叛之後。牢籠之処。母（二品官女。号京極局。）相計而暫隱其号。置休所之傍。而今度御進発之日。称譜第之勇士。企慇懃吹拳之間候御共。忽顯

兵略。即開佳運者也。

文治五年（一一八九）の奥州合戦における河村秀清の例で、頼朝が加賀美（のち小笠原）長清を秀清の烏帽子親に指名した例である。秀清の母も幕府の女房であり、頼朝との個人的つながりがその背景にあった。以上の二例は、女性を介した頼朝を囲む親族的關係のなかでの元服というものである。ゆえに頼朝との結び付きは元より強い。ただし、必ずしも頼朝自身が加冠役を務めてはいないことにも注意しておきたい。

やはり、頼朝の意志が入りながら、自分の側近に加冠役をやらせているのが、次の例である。

●『吾妻鏡』文治五年（一一八五）四月十三日条【表14】

^{（時政）}北条殿三男（十五歳。）於御所被加首服。秉燭之程。於西侍有此儀。武州。駿河守広綱。遠江守義定。参河守範頼。江間殿。新田藏人義兼。千葉介常胤。三浦介義澄。同十郎義連。畠山次郎重忠。小山田三郎重成。八田右衛門尉知家。足立右馬允遠元。工藤庄司景光。梶原平三景時。和田太郎義盛。土肥次郎実平。岡崎四郎義実。宇佐美三郎祐茂等着座。^{（源頼朝）}（東上。）二品出御。先三献。江間殿令取御約給。千葉小太郎成胤相代役之。次童形依召被参進。御前蹲居。^{（佐原）}次三浦十郎義連被仰可為加冠之由。義連頻敬屈。頗有辞退之氣。重仰曰。只今上首多祇候之間。辞退一旦可然。但先年御出三浦之時。故広常与義実諍論。義連依有之無為。其心操尤被感恩食キ。此小童。御台所殊憐愍給之間。至将来。欲令為方人之故。所被計仰也。此上不及子細。小山七郎朝光。八田太郎朝重取脂燭進寄。

梶原源太左衛門尉景季。同平次兵衛尉景高。持參雜具。義連候加冠。名字（時連五郎。）云云。今夜加冠役事。兼日不被定之間。

思儲之輩多雖候。当座御計。不能左右事歟。

舅の北条時政の三男の元服の模様である。このときは、頼朝側近の佐原義連が加冠役となっている。文末にあるように、加冠役についてはあらかじめ決めておらず、我こそは、と思っていた者も多かったようである。御家人にとって加冠役が名誉と考えられていたことがわかる。いずれにしろ、頼朝の義弟という関係であるから親族関係のなかでのこととなる。そういう意味では、先に引用した北条泰時（頼時）の元服（表20）も、『吾妻鏡』編纂者の意図とは別に、本来頼朝の家族関係という範疇を出ていなかったものかもしれない。

●『吾妻鏡』建久四年（一一九三）十月十日条【表19】

野本斎藤左衛門大夫基員子息小童。於幕府遂首服。進御鎧以下。

自將軍家。又賜重宝等云云。

武蔵国御家人の野本時員の元服記事が『吾妻鏡』に載せられた理由はいささかはっきりしないが、元服童の野本時員の実父は下河辺政義であり、兄弟の行平は頼朝に重用され、幕府女房も輩出している下河辺氏であるためかもしれない。

なお、次のような特殊な事例もある。

●『吾妻鏡』建久元年（一一九〇）九月七日条【表16】

入夜故祐親法師孫子祐成（号曾我十郎。）相具弟童形。（号篁王。）
參北条殿。於御前令遂元服。号曾我五郎時致。賜竜蹄一疋。（鹿毛。）
是祖父祐親法師者。雖奉射二品。其子孫事。於今者不及沙汰。祐

成又相從繼父祐信。在曾我庄。依不肖雖未致官仕。常所參北条殿也。然間今夜儀強不及御斟酌云云。

この場合の「御前」は、時政御前という意味であろうから、北条時政が特別に元服を遂げさせたということである。時政は仮名四郎であったから、五郎はそれに次ぐ意味を持つ。兄が十郎なのに、弟が五郎と逆転した理由である。

次に三代実朝の時期となる。まずは北条一門である。

●『吾妻鏡』建永元年（一二〇六）十月二十四日条【表22】

相州二男（年十三。）於御所元服。号次郎朝時。

●『吾妻鏡』建保元年（一二一三）十二月二十八日条【表23】

今日入夜。相州鍾愛若公（九才。当腹。）於御所元服之儀。三浦

左衛門尉義村為加冠也。号四郎政村云云。

●『吾妻鏡』建保二年（一二一四）十月三日条【表26】

卯剋。相州參着給。戊剋。相州子息於御前元服給。理髮前駿河守

惟義朝臣也。号相模五郎実義。

三つ目の史料の場合、加冠役は記されていないものの、「（実朝）御前」とあり、「実義」の名前から將軍源実朝と考えられる。理髮役は源氏一門の重鎮・大内惟義だった。

以上のように、北条義時の子息たちの名越朝時・北条政村・金沢実義（のち実泰）は、將軍御所もしくは実朝御前で元服を果たしており、朝時・実義の場合は実朝自ら加冠役を務めている。政村の場合は、有力御家人の三浦義村が加冠役を務めている。三浦氏による北条氏の加冠役は、北条時房元服時の佐原義連に続いて二例目である。

さて、金沢北条氏は、『吾妻鏡』の編纂に深い関係が推測される一族であり、前に見た実泰（実義）、そして実時・顕時の三代の元服記事が掲載されている。実時の元服の模様を見てみよう。

●『吾妻鏡』天福元年（一二三三）十二月二十九日条【表32】

（金沢実泰）
陸奥五郎子息小童（歳十。）於武州御亭元服。号太郎実時。如駿河前司在座。一事以上。亭主御経営也。即又為加冠。是非兼日之構。有所存俄及此儀之由。被仰云云。

実泰の元服の二十年後に行われた実時の元服は、三代執権北条泰時の私邸において、泰時の差配で行われている。

泰時が関わった元服はこの他、三浦泰村（表27）、松葉惟泰（表29）、武田信時（表30）がある。

得宗家に準じる庶兄の例を見てみよう。

●『吾妻鏡』建長八年（一二五六）十二月二十九日条【表40】

（北条時頼）
相州御息被加首服。号相模三郎時利。（後改時輔。）加冠足利三郎利氏。（後改頼氏。）

時輔は源氏一門の足利頼氏を烏帽子親に元服している。先述のように、弟で嫡男の時宗はこの翌年、將軍宗尊親王を加冠役として元服することになるから（表42）、その差は明らかである。

次に一般御家人の例を見てみよう。

●『吾妻鏡』建長二年（一二五〇）十二月三日条【表38】

（北条時頼）
今日。佐佐木耆岐前司泰綱子息小童（九歳。）於相州御亭遂元服号三郎頼綱。御引出物以下経営。尽善極美。一門衆群参。各随所役云云。奥州。秋田城介等所被参会也。

佐々木氏は、幕府創業を支えた一族であるが、頼綱は得宗家に近侍した京極流ではなく、近江守護を務めた六角流である。北条時頼亭で元服している。

『吾妻鏡』以外では、史料が少なくなってしまう、諸家の系図に頼らざるをえない^⑩。比較的、信憑性が高いと思われるものでは、大友頼泰が北条時頼を（表36）、一族で鎮西評定衆を務める豊後国御家人戸次氏の時親・貞直・高貞の三代が、それぞれ時宗・貞時・高時を加冠役として元服したことを伝えている（表47・50・56）。

安芸国御家人の松葉氏は、朝宗（実宗）とその子惟泰・惟時兄弟が、実朝を加冠役とした後、北条泰時及び時頼亭で元服したことを伝えている（表25・29・41）。

以上のように、初期における元服は、一族内部での儀礼にとどまっていることが多く、本来親族関係のなかで行われる私的な行事だったと考えられる^⑪。それが儀礼化を遂げ、公的なものになるのは鎌倉幕府御家人制との関連において、その性格が変化したためであろう。そして、頼経以降、將軍が加冠役を務める事例は見られなくなっている。

三、一字付与の発生と展開

次に偏諱（一字付与）を考えてみたい。烏帽子親から実名の一字を頂くものである。このことによって両者は親子の関係にも擬せられることになる。なお、烏帽子子は一字を上の子もしくは下の字に使用し、あるいは後に別の実名に改める場合もある。

ところで、こうした慣行はいつからなのであろうか。『古事類苑』は

治承の頃としている。これは明らかに、治承四年（一一八〇）十月二日の頼朝による結城朝光への偏諱（表8）を初例と見なしているのである。しかし、それより遡ることは確実であろう。『千葉系図』と『相馬系図』が伝える、源義家の烏帽子子という「平常永」は偏諱が共通していないので、その頃はまだ行われていなかったと考えられるが、『源平盛衰記』には、摂津国渡辺の住人で上西門院侍となる遠藤盛遠が、一門の烏帽子親・遠藤遠光から「遠」の字を与えられたことが見える（表1）。遠藤盛遠の事例は、一字付与が一族内の行為だったことを示している。例えば、源為義は、義光流源氏の武田太郎信義（龍光丸）の烏帽子親で、同じく加賀美遠光は石和五郎信光（光寿丸）の烏帽子親と伝えており（『甲斐信濃源氏綱要』）、元服儀礼と同じく、一字付与も親族内から始まったことを示唆している。

時代が下ると、主従関係のもとでの家臣・被官への偏諱が見られるようになる。平重衡の家臣平重国（表5）、平重盛の家臣与三重景（表4）などが知られ、大中臣惟重は「三位中将（平）重衡理髮ノ子」としているので（表6）、平重衡の偏諱なのである。すなわち、主従関係を補強する偏諱は、おそらくは平家一門で本格的に行われ始めたと考えられる。平家御家人制は最近注目されており、一字付与という点からも鎌倉幕府御家人制を先取りしていた可能性がある。

一方、源氏では多田源氏の源頼政の家人で摂津国池田郡司の紀望政の例があるが（『尊卑分脈』）、源義経の家臣である鷲尾経春（表10）や伊勢義盛（表11）・河野通経（表12）らは義経の偏諱と伝えている。義経の活躍期間は当然のことながら短かったわけであるが、複数列

見えることからすれば、義経主従のつながりは強いものがあったと推測できる。

ところで、頼朝が行なった偏諱であるが、『吾妻鏡』では先に見た二例（表8・18）しかないものの、「朝」もしくは「頼」を使用したことがわかる。『伊王野系図』にも、「与一（那須資隆）無嗣、故依頼朝公之下知、以弟御房子為嫡子、（中略）従頼朝公賜諱字号頼資」と見える（表9）。そもそも頼朝自身の元服を伝える史料はないが、「頼」に関しては院近臣の藤原信頼の「頼」と考える向きもあるが、祖の源頼信・頼義の「頼」であろう。

次いで、実朝の場合も『吾妻鏡』では先に見た二例しかないが（表22・26）、「朝」もしくは「実」を使用したことがわかる。頼朝と実朝の場合、本人の臨席があっても、別の者に加冠役を任せることもあり、一字付与を積極的に行なったようには思えない。

さて、得宗家の御家人に対する偏諱については、紺戸淳氏の研究が参照されるところである。紺戸氏は得宗家からの一字付与を受けた形跡のある御家人は、各家の家督であり、それは直系父子間で連続しており、したがって各家の家督と家職が同時に安堵されているものと考証した。先述したように、御家人の元服する史料はほとんどないのであるから、生年の確定した御家人の十歳から十五歳位までの年代が、当該時期の得宗と実名の一字が共通している御家人を洗い出すという作業を行ったわけである。氏はそれぞれの家職を推測しつつ、政所執事の二階堂氏以下、十の御家人家を抽出された。しかし、一字付与自体が必ずしも御家人の家職の安堵を意味したとは言えない。

ここで改めて、今までも見てきた元服に関する史料も含めて、確実なところから整理してみよう。

初代時政は、前に見たように曾我兄弟の弟五郎時致の烏帽子親である(表16)。曾我兄弟の仇討ちの黒幕に時政を想定する根拠となっていることは周知の事実である。なお、『甲斐信濃源氏綱要』は武田信政の加冠役を時政としている。これが事実とすれば、時政は北条氏の通字「時」、もしくは「政」を使用したのである。二代義時の偏諱に関する史料は今のところない。

三代泰時は、先に見たように北条一門の金沢実時(実泰嫡男)の加冠役であった(表32)。更に『佐野本三浦系図』には「元服之時北条泰時加冠、授諱字」とあり、三浦泰村に一字付与している(表27)。

この他、武田信時の加冠役を務めている(表30)。これが事実とすれば、泰時は北条氏の通字「時」、もしくは「泰」を使用したのである。

四代時氏は執権となる前に早世したため、事例はない。

五代経時は、御家人のなかに「経」を使用するものがおり、「経」を下賜したのであるが、それを示す明確な史料がない。将軍頼経からの一字を更に下賜したものと考えられる。

六代時頼は、先に見た佐々木頼綱の加冠役で(表38)、『大友系図』に「北条時頼賜一字」とあるように(表36)、佐々木頼綱と大友頼泰には将軍頼経からの一字を更に下賜したのである。この他、武田時綱の加冠役を務めている(表39)。これが事実とすれば、時頼も北条氏の通字「時」、もしくは「頼」を使用したのである。

七代時宗は、先に見た金沢時方の加冠役となっている(表43)。また、

『戸次系図』の時親の註には「平時宗為元服、依被免諱之時字」とある(表47)。この他、武田信宗の加冠役を務めており(表46)、これが事実とすれば、時宗は将軍宗尊親王からの一字「宗」と北条氏の通字「時」を使用したのである。

『吾妻鏡』が終了してしまつと、史料は少なくなつてしまい、史料の信憑性もいささか落ちるが、先に引用した『戸次系図』の貞直(千熊丸)の註には「平貞時為元服、被免諱之貞字」とあり(表50)、その長男高貞の註にも「於相模守高時為元服、号太郎高貞」とある(表56)。また、『異本伯耆卷』には「足利讃岐守は、相模守貞時が烏帽子子にて、貞氏と号し、其子高氏は、赤橋武蔵守久時が婿と成つて、被任治部大輔ける、高氏も高時の称号の一字をうけて、高氏とぞ云ける」とあり(表51・58)、八代貞時は「貞」、九代高時は「高」を使用したことがわかる。

なお、一般御家人による偏諱については、先に見た佐原義連(表14)、小笠原長清(表15)、三浦義村(表23)の事例があり、藤九郎盛長(表2)の事例も加えられるが、いずれも源頼朝もしくは実朝の指示によるものである。また、足利利氏の事例(表40)も北条時頼の意向が強く反映したものであり、上位者の介在を想定せざるをえない。ただし、足利貞氏による武田氏信への一字付与(表59)を信ずることが出来れば注目すべき事例となる。

史料上、明確なものは以上であるが、主要な御家人のうち、歴代の得宗の一字を数代にわたって使用している家は十六家ほど検出したことがある。もちろん、その数は更に増えるだろう。このような現象の

背景として、得宗家による東国御家人との婚姻政策の代替案という指摘もあるが、いずれにしても一字付与という儀礼行為を通じて御家人の統制を深め、御家人側もこれを受容した状況が見てとれるのである。ただし、御家人の側に立ってみれば、烏帽子親が北条経時・時頼、もしくは時宗であったとしても、もともと將軍頼経や宗尊親王に由来する一字だという認識があったかもしれない、その意味では、北条氏の通字である「時」の下賜や北条泰時段階、そして貞時・高時期の事例を再検討する必要がある。

四、おわりに―鎌倉幕府主従制再考に向けて―

以上、元服の様相と一字付与について見てきた。元服儀礼はもとも一族内における私的なものであったが、武家の棟梁の出現により、半ば公的なものとなった。したがって、武士の主従制を考察する上で元服儀礼はすぐれて重要なものである。これを前提として、その問題点をまとめてみたい。

①場の問題

御家人の元服であれば、本来將軍御所で行われるべきであろう。ところが、得宗家の私邸で元服が行われるようになっていく。例えば、松葉惟泰が「武蔵前司入道殿（泰時）亭」において（表29）、弟惟時は「西明寺殿（時頼）亭」において元服したことが見える（表41）。これはとりもなおさず、將軍が烏帽子親になる途を塞ぐものであり、將軍の側近集団の形成を防ぐに役立ったはずである。似たような事例では、鎌倉幕府法において、將軍への八朔の贈答儀礼を執権・連署に

限ったことがある。このため一般御家人は、北条得宗家を烏帽子親に選ぶことが多くなり、実質的な主人は、將軍ではなく、得宗となったのである。

②形骸化

烏帽子親子関係は、擬制的な親子関係であるから、本来的には烏帽子親が年齢的に上でなければならぬだろう。例えば、頼朝と結城朝光は、二十歳離れており、まさに親子ほどの年齢の開きがある（表8）。ところが問題なのは、金沢顕時の元服である。

●『吾妻鏡』正嘉元年（一二五七）十一月二十三日条【表43】

酉剋。越後守実時朝臣息男（十歳）（北条時頼）於相州禪室御亭元服。号越後四郎時方。理髮丹後守頼景。加冠相模太郎。（時宗）（七歳。）

顕時（時方）は十歳のとき、得宗時頼亭において元服しているが、加冠はこの年元服したばかりで七歳の時宗であった。すなわち、烏帽子親子の年齢は逆転しているだけでなく、時宗はいまだ家督を継いでいないのである。これはおそらく、得宗時頼が前年の康元元年（一二五六）三十歳で出家していたため、加冠役を務められなかっただけで、会場がそうであるように実質的主催者は時頼であろう。

他にも、例えば足利高氏などは十五歳のとき元服している（表58）。烏帽子親の北条高時は十七歳で二才しか離れていない。更に高氏には早世した兄高義がいたので、高義と高時はあるいはほぼ同年齢と思われる、偏諱行為そのものはかなり虚礼化が進んでいたことがわかる。そこでこれを補強するために、北条得宗家によって一字付与が積極的に活用され、儀式の中心的要素となっていくものと考えられる。

残された課題としては、儀式内容そのものも更に掘り下げる必要がある。儀式道具を揃える陪膳役と、臣下の役目で、儀式の補助役となる役送、そして枕飯行事等の附帯儀式にも注意しなければならない。また、今回は『吾妻鏡』を中心に見たため、將軍から偏諱を賜っている可能性が高い二階堂氏や赤橋北条氏の場合については考察出来なかった。

最後に次の史料にも注目しておきたい。

●『吾妻鏡』元仁元年（一二二四）七月十八日条

駿河前司義村謁申武州云。（北条義時）故大夫殿御時。義村抽微忠之間。為被

表御懇志。（北条政村）四郎主御元服之時。以義村被用加冠役訖。以愚息泰村

男為御猶子。思其芳恩。貴殿与四郎主。就両所御事。争存好悪哉。

只所庶幾者。世之安平也。（後略）

三浦義村は、自らは北条政村の元服に際し、烏帽子親となったことを回顧し（表23）、嫡男泰村が北条泰時の猶子とされたことを恩義に感じているのである。三浦泰村はやはり泰時の烏帽子子であったし（表27）、正室が泰時の女であったばかりでなく、泰時の猶子（財産関係を伴わない養子）でもあったというのである。烏帽子子、猶子、養子など、中世における擬制的親族関係は多様に広がっているため、場面場面における使い分けに注意を払っていく必要がある。

註

（1）二本謙一『中世武家儀礼の研究』（吉川弘文館、一九八五年）、同「人生儀礼の作法」（同著『中世武家の作法』吉川弘文館、一九九九年）

など。

（2）中澤克昭「武家の狩猟と矢開の変化」（井原今朝雄・牛山佳幸編『論集 東国信濃の古代中世史』岩田書院、二〇〇八年）

（3）白井永二「吾妻鏡の民俗資料」（同著『鎌倉風草集』鶴岡八幡宮社務所、一九八六年。初出一九七五年）など。

（4）紺戸淳「武家社会における加冠と一字付与の政治性について―鎌倉幕府御家人の場合―」（『中央史学』二三号、一九七九年）、角田朋彦「偏諱の話」（『段かづら』三・四号、二〇〇四年）、山野龍太郎「鎌倉期武士社会における烏帽子親子関係」（山本隆志編『日本中世政治文化論の射程』思文閣出版、二〇一二年）など。

（5）なお、將軍家以前の清和源氏では、『甲斐信濃源氏綱要』という系図より歴代の元服記事が知られる。例えば、河内源氏の祖となる源頼信（清王丸）は十三歳のとき、叔父源満政を加冠役として、その嫡男頼義（王代丸）は十四歳のとき、叔父源頼光を加冠役として元服したと伝えている。ちなみに頼義は摂津国多田での誕生とも伝えており、これに横澤大典氏は注目されている（同「源頼信―河内源氏の成立―」元木泰雄編『古代の人物6 王朝の変容と武者』清文堂、二〇〇五年）。甲斐源氏の祖武田義清（文殊丸・音光丸）は、十三歳のとき、叔父源義家を加冠役とし、嫡男清光（徳光丸）は十七歳のとき、義家の子源義国を加冠役として元服したと伝える。いずれも源氏一門を烏帽子親として伝えていることには注目したいが、系図史料であるため参考にとどめておく。

（6）中村義雄「元服儀礼の研究―天皇元服について―」（『二松学舎大

学論集』昭和四〇年度、一九六五年)

(7) 森幸夫「得宗家嫡の仮名をめぐる小考察―四郎と太郎―」(阿部猛編『中世政治史の研究』日本史料研究会、二〇一〇年)

(8) 五味文彦「『吾妻鏡』の筆法」(同著『増補 吾妻鏡の方法 事実と神話にみる中世』吉川弘文館、二〇〇〇年)

(9) 拙稿「御家人下河辺氏・幸島氏について」(『野田市史研究』一二号、二〇〇一年)

(10) ちなみに『小笠原系図』や『甲斐信濃源氏綱要』は、甲斐源氏の小笠原・武田氏に関する元服情報が豊富である。加賀美遠光(豊松丸)は保元二年(一一五七)十六歳で元服し、二郎遠光と名乗った。烏帽子親を新田義重(二十二歳)と伝える。その次男小笠原長清(豊松丸)は承安四年(一一七三)十三歳で元服し、孫二郎長清と名乗った。烏帽子親は足利義康と伝える。ここまでは史料性を考え、データベース化しなかった。

その子長経(豊光丸)は建久二年(一一九二)十一月五日、十三歳で元服し、長経と名乗った(表18)。加冠を源頼朝、理髪は下河辺行平と伝える。なお、十一月五日は祖新羅三郎義光の元服の日である。ここまでの三代の加冠役は、八幡太郎義家流の源氏一門としている。

その後、嘉禎二年(一二三六)正月十三日、長政が十五歳で元服を果たしており(表34)、その後、孫の宗長が弘安七年(一二八四)正月十一日、十三歳で元服した後(表49)、貞宗・政長も十三歳で社前での元服を果たしており(表53・60)、以後当家の例となっている。先述のように、新羅三郎義光の流れを汲む小笠原氏は、義光の故事に

ちなみ、新羅明神社前での元服を果たしている。

武田氏は、信時が北条泰時を烏帽子親に(表30)、時綱が時頼を(表39)、信宗が時宗を(表46)、氏信が足利貞氏を烏帽子親としたと伝えている(表59)。

おそらく、小笠原氏が室町幕府において礼法家となったことがその背景にあるのであろうが、もう少し史料裏付けが欲しいところである。

(11) 飯沼賢司「人名小考―中世の身分・イエ・社会をめぐる―」(竹内理三先生喜寿記念論文集刊行会編『莊園制と中世社会』東京堂出版、一九八四年)

(12) 高橋昌明「平氏家人と源平合戦」(『軍記と語り物』三八号、二〇〇二年)

【参考】

・水野智之『名前と権力の中世史 室町將軍の朝廷戦略』(吉川弘文館、二〇一四年)

・拙稿「鎌倉幕府と御家人―東国御家人を中心に―」(葛飾区郷土と天文の博物館編『鎌倉幕府と葛西氏』名著出版、二〇〇四年)

・西村隆「平氏『家人』表―平氏家人研究への基礎作業―」(『日本史論叢』一〇号、一九八三年)

【表】中世前期の武家元服関係史料データベース

No.	年月日	西暦	元服童・幼名（年齢）	仮名・実名	父（実父）	加冠（年齢）	理髪	場	出典	備考
1	仁安元・10・17	1151	遠藤（13）	盛遠のち文覚	茂遠（持遠）	遠藤遠光		伊豆国 （頼朝御前）	『源平盛衰記』18	
2		1156	佐々木秀綱（16）	三郎盛綱	秀義	藤九郎盛長 (32)			『佐々木系図』	改名
3		1166	源駒王丸（13）	次郎義伸	（義賢）			石清水八幡宮	『平家物語』6	
4		1167	松王（9）	与三重景	景康	平重盛（30）			『延慶本平家物語』5 末	
5			平	重国	惟忠	平重衡	平重衡		『源平盛衰記』	
6			大中臣	六郎惟重					『姉小路系図』	
7	承安4・3・3	1174	源牛若丸・遮那王 (16)	九郎義経	（義朝）			頼朝御前	『吾妻鏡』3	
8	治承4・10・2	1180	小山（14）	七郎宗朝 （のち結城朝光）	政光	源頼朝（34）			『吾妻鏡』	
9			那須	頼資	資隆	源頼朝		頼朝御前	『伊王野系図』	
10	元暦元・	1184	鷲尾（17）	三郎経春		源義経（26）			『源平盛衰記』36	
11			伊勢	三郎義盛		源義経			『平治物語』3	
12			河野	五郎通経	通清	源義経			『越智系図』	
13		1184	曾我一万（13）	十郎祐成	祐信 （河津祐泰）				『曾我物語』	
14	文治5・4・13	1189	北条（15）	五郎時連 （のち時房）	時政	佐原義連		御所西侍	『吾妻鏡』	
15	・8・12	1189	河村千鶴丸（14）	四郎秀清	秀高	加賀美長清		頼朝御前	『吾妻鏡』	
16	建久元・9・7	1190	曾我箱王（17）	五郎時致	祐信 （河津祐泰）	北条時政（52）		駿河富士野 （時政御前）	『吾妻鏡』	
17			鎌田	通清	資通	北条時政	下河辺行平	頼朝御前	『山内首藤系図』	義朝乳父
18	2・11・5	1191	小笠原豊光丸（13）	時員 （弥）太郎長経	長清	源頼朝（45）		幕府	『小笠原系図』	
19	4・10・10	1193	野本	時員	基員 （下河辺政義）			幕府西侍	『吾妻鏡』	泰時13歳は誤り
20	5・2・2	1194	北条金剛丸（12）	太郎頼時 （のち泰時）	義時	源頼朝（48）			『吾妻鏡』	
21	建仁3・10・8	1203	源千幡（12）	実朝	（頼朝）	平賀義信	北条時政（65）	時政名越亭	『吾妻鏡』	外祖父比企朝宗
22	建永元・10・24	1206	名越（13）	次郎朝時	義時	源実朝（15）		御所	『吾妻鏡』	
23	建保元・12・28	1213	北条（9）	又次郎政村	義時	三浦義村		園城寺新羅明神社	『吾妻鏡』	
24	2・2・12	1214	小笠原豊松丸（13）	四郎長忠	長経	源実朝（23）			『小笠原系図』	
25	2・4・19	1214	松葉実宗（11）	朝宗	平賀資宗	源実朝（23）		御所	『平賀氏系図』	改名
26	2・10・3	1214	金沢	五郎実義 （のち実泰）	義時	源実朝（23）	大内惟義		『吾妻鏡』	
27			三浦	二郎泰村	義村	北条泰時（44）		二棟御所南面	『佐野本三浦系図』	正室は泰時の女
28	嘉禄元・12・29	1225	藤原三寅（8）	頼経	（追家）				『吾妻鏡』	

29	2・	1226	松葉(15)	惟泰 (のち泰重)	資宗	(北条泰時) (45)		泰時亭	『平賀氏系図』	
30	寛喜元・1・15	1229	武田音光丸(10)	六郎、五郎二 郎信時	信政	北条泰時(48)			『甲斐信濃源氏綱要』	
31	貞永元・11・28	1232	京極(12)	四郎氏信	信綱					
32	天福元・12・29	1233	金沢(10)	太郎実時	実泰	北条泰時(52)		泰時亭	『吾妻鏡』	
33	2・3・5	1234	北条業上(11)	弥四郎経時	(時氏)	藤原頼経(17)	北条時房(60)	御所寝殿西向簾中	『吾妻鏡』	
34	嘉禎2・正・13	1236	小笠原豊松丸(15)	孫二郎長政	長忠			園城寺新羅明神社	『小笠原系図』	
35	3・4・22	1237	北条成寿(11)	五郎時頼	(時氏)	藤原頼経(20)	三浦義村	泰時亭 (頼経御前)	『吾妻鏡』	
36	仁治3年以前	1242 以前	大友薬師丸(泰直)	頼泰	親秀	北条時頼			『大友系図』 鷹尾家文書	改名?
37	寛元2・4・21	1245	藤原(6)	頼嗣	頼経(27)	北条経時(21)		二棟御所南面	『吾妻鏡』	
38	建長2・12・3	1251	佐々木(9)	三郎頼綱	泰綱	(北条時頼) (24)		時頼亭	『吾妻鏡』	
39	5・1・15	1254	武田龍光丸(9)	六郎時綱	信時	北条時頼(27)			『甲斐信濃源氏綱要』	
40	8・8・11	1257	北条宝寿(9)	三郎時利 (のち時輔)	時頼	足利利氏 (のち頼氏)			『吾妻鏡』	
41			松葉	惟時	資宗	北条時頼		時頼亭	『平賀氏系図』	
42	正嘉元・2・26	1257	北条正寿(7)	太郎時宗	時頼	宗尊親王(16)	北条長時 (執権)	二棟御所	『吾妻鏡』	時頼出家後
43	・11・23	1257	金沢(10)	四郎時方 (のち頼時)	実時	北条時宗(7)	安達頼景	時頼亭	『吾妻鏡』	
44	2・11・13	1258	小笠原豊松丸(13)	彦次郎長氏	長政	長忠(祖父)		園城寺新羅明神社	『小笠原系図』	
45	文永7・2・23	1270	惟康親王(7)	惟康親王	宗尊親王	北条政村(66)		(御所)	『鎌倉年代記』	時宗は19歳
46	建治3・11・11	1277	武田徳光丸(9)	孫六信宗	時綱	北条時宗(27)		鎌倉	『甲斐信濃源氏綱要』	母重時女
47			戸次	太郎時親	重秀	北条時宗			『戸次系図』 『大友系図』	
48	・12・2	1277	北条幸寿(7)	太郎貞時	時宗	(源惟康(14)	北条宗政(25)	二棟御所西侍	『建治三年記』	
49	弘安7・1・11	1284	小笠原豊松丸(13)	孫次郎宗長	貞長	北条時宗		新羅明神社	『小笠原系図』	
50			戸次千熊丸	孫太郎貞直	時親	北条貞時			『戸次系図』	
51			足利	三郎貞氏	家時	北条貞時			『異本伯耆卷』	
52	正応5・5・5	1282	武田龍光(10)	彦六信武	信宗			甲斐祖社	『甲斐信濃源氏綱要』	貞時出家後
53	徳治元・11・20	1306	小笠原豊松丸(13)	彦五郎貞宗	宗長			園城寺新羅明神社	『小笠原系図』	貞時出家後
54	延慶元・8・26	1308	守邦親王(8)	守邦親王	久明親王			(御所)	『鎌倉年代記』	
55	2・1・21	1309	北条成寿(7)	太郎高時	貞時	(守邦親王) (9)		(御所)	『鎌倉年代記』	
56			戸次	太郎高貞	貞直	北条高時 (北条高時) (12)			『戸次系図』 『尊卑分脈』	
57	正和3・12・14	1314	佐々木(9)	三郎時信	頼綱					

61	60	59	58
・ 12 ・ 15	元弘 元・ 11・ 23	元亨 2・ 3・ 15	元応 元・
1331	1331	1322	1319
北条万寿(7)	小笠原豊松丸(13)	武田徳光丸(11)	足利(15)
太郎邦時	孫二郎政長	彦太郎氏信	又太郎高氏
高時	貞宗	信武	貞氏
(31) (守邦親王)		足利貞氏(51)	北条高時(17)
(御所)	園城寺新羅明神社		
金沢文庫文書38号	『小笠原系図』	『甲斐信濃源氏綱要』	『足利系図』 『異本伯耆巻』